

# 中高一貫校の生活指導組織

## —— イギリスの場合を参考に ——

学校長 榊 達 雄

### 1 イギリスのコンプリヘンシヴ・スクールの ハウス・システム

(1) ハウス・システムは、もともとはイギリスの伝統的な中等学校で、全寮制を基本とするパブリック・スクール(私立)の寮制度を指し、生活指導は寮が単位となって行われていたの、内容的には生活指導組織にもなっていた。大規模なコンプリヘンシヴ・スクールに対する批判、すなわち大規模校では人間関係、特に生徒と教師との人間関係が希薄になるという批判に対する対応として、全寮制ではなく、通学制のコンプリヘンシヴ・スクールにおいてもハウス・システムを生活指導組織として採用されることが多い。

中高一貫のコンプリヘンシヴ・スクール(11-17、18歳)の第6級(sixth form、16-18歳)では、専門的にかなり高いレベルの教育(日本の大学の一般教育に近い)が少数で行われる。しかし義務教育年齢(1972年から16歳まで、それ以前は15歳まで)後第6級に進学する生徒数は相当減少するので(1974-77年の義務年限後第12年目への全国平均進学率は20%台である<文部省編『昭和55年度我が国の教育水準』大蔵省印刷局、1981年、17頁)、生徒の希望に応じて多くの種類の科目を提供しようとすると、しかも経済的合理性も考慮にいと、大規模にならざるを得ない。イギリスでは、伝統的に1,000人以上にもなる大規模校は好まれなかったため、大規模校になることが批判の対象になった。伝統的なパブリック・スクールはもとより、3分類制度時代のグラマラー・スクールでは、ほとんどの生徒が第6級に進学するので、小規模校でも第6級の授業は成り立つわけである。したがって、生徒と教師との人間関係は希薄になることはない。

(2) 生徒を編成する方法としては、全校生徒を水平的に分ける方法と垂直的に分ける方法がある。水平的には、下級学年部、中間学年部、上級学年部(第6級を含む場合と含まない場合がある)に分け、それぞれ校舎も分けることがある。垂直的には、ハウスに分ける方法があり、各ハウスは200人の生徒か

らなり、生徒は全年齢、全能力レベルを含むことになっている(Hewitson, J.N., *The Grammar School Tradition in a Comprehensive World*, Routledge & Kegan Paul, 1969, p. 90参照)。ハウス・システムは、コンプリヘンシヴ・スクールの95%に存在するといわれる。1,500人の男女共学学校では、各150人の男子ハウス5つおよび女子ハウス5つが存在するか、または各300人の男女混合ハウス5つが存在するかもしれない。ペドレイは、学校生活で最も大切な部分といわれる点において、女子から男子を正式に分離する前者の編成が、コンプリヘンシヴ・スクールの共育共同体において正当化され得る理由を理解することは困難である、という(Pedley, R., *The Comprehensive School*, Penguin Books, 1963, pp. 122-3)。

モンクスの郵送によるアンケート調査によれば、回答を得た331校のうち299校がハウスを採用していた。そしてハウスは、学校によって、学校生活において現実的な全面的な役割を果たすこともあれば、ゲーム等における競争の基礎単位にしか過ぎないこともある。ハウスの規模では、最も人気のあるのは151-200人のハウスである。各学校のハウスの数は、一定していなく、最も共通に近いのが4つである。生徒数601-1,000人の3校では、それぞれ各51-100人のハウスが少なくとも6つあり、1,000-2,000人の8校でも、それぞれ各101-150人のハウスが少なくとも6つある。2,000人を超える学校では、各151-200人のハウスが少なくとも10なければならない。少数のハウスをたくさんもつ学校もあれば、慣習的にハウスは少数のまま維持する学校もあり、実際に7校では350人を超えるハウスがあり、これらのうち3校では400人より多いハウスがある(Monks, T.G., *Comprehensive Education in England and Wales*, NFER, 1968, pp. 40-2)。

以上から、ハウスの規模は150-200人が一般的であるといえよう。

(3) モンクスの調査によれば、ハウス・システムの主要な目的は、社会的なもの(ゲームに関して)であり、その次は管理的なもの(登録、通知等)である。男子校では、女子校よりもハウスへ大きな強

調点が置かれていることが、ほとんどすべての目的カテゴリーにおけるより高い比率から分かる。ハウスによる目的は、ほかに、「規律」「食事作法」「学業」「父母とのコンタクト」「行動問題と主要な困難」「社会的サービス」「競争活動」「進路」がある。生徒をハウスに配分する基準については、ハウスを維持している299校のうち205校（69%）まで特別のものをもっていなかった。残りのほとんどが、アカデミックな学力ないし社会的レベルまたは両方の平等な配分を有するハウスを、目指していた。主張される社会的基準は、「同じ家族のメンバーと一緒にされること」「友達と一緒にされること」であり、いくらかの田舎の学校では、同じ村の住民は同じハウスに配分された。いくらかの学校の基準は、同質であるが相互に似ていないハウスになるように立案されていた。これらのハウスは、男女別のハウスから学力レベルに基づくハウスまで多様であった (ibid., pp. 42-3)。

通学制の学校において、ハウス・システムを採用することの弱点もある。ハウスは、学校の活動の核心、すなわち学業にとって周辺的である。最も純粋な持続する人間関係が作り上げられるのは、教授・学習活動の困難と満足を通してである。通学制の学校のハウスは、率直に言ってこの基礎をもっていない。能力混合のハウスのグループにおいてなされる教授は、相対的に少ない。ハウスの重要性を強調することによって、この弱点を克服しようとすればするほど、ますます困難を増大させることになるかもしれないといわれる。例えばあるハウスマスターは、聡明な20%と最も問題のある20%はよく知っているが、残りの60%はほとんど知らないかもしれない。ハウスの年長の生徒は、ときには成長してハウスから離れていくことがある。第6級生は、ハウスの生徒の大多数と共通点をほとんどもっていない。かれは、かれと同年齢グループにおいて、わいわい騒ぎたいと思っても、ハウスには同年齢層はあまりにも少ない。ハウスを11歳から16歳までに限り、第6級生と一緒にすることも考えられる。そのような立案は、象徴的かつ実質的な統合的效果をもち、さらに真に適当な教員メンバーだけをチューターとして利用することが可能となるだろうとされる。また、ロンドンのウォンズワース校では、水平分割と垂直分割の異なる組合せがなされている。すなわち、11歳から13歳までは下級部に、13歳から18歳まではハウスに分割されている。このことによって、若年の男子生徒集団は、初等教育と完全な中等教育との間の理想的な移行期を得る。チューター・グループは13歳で始まり、青年期を包含する。この型は、カリキュラムの問題や、13歳までの基礎コースやそれ以後

の専門へ傾斜したコースにも適合するといわれる (Pedley, op.cit., pp. 124-6)。

第6級生が下級生の面倒をみ、リーダーシップを発揮することを、ハウスの長所であるといわれることもある。実際の学校における他の生徒との関係等を考慮して、第6級生の位置づけを考える必要がある。

(4) 生徒を垂直的に分ける方法として、ハウスのほかにチューター・グループがある。規模はハウスより小さい。モンクスの調査では、回答した学校の34% (113校) がチューター・グループを採用していた。規模は、ほとんどが21-30人であったが、6校で10人を下回り、1校で60人を超えていた。チューター・グループの主要な目的としてあげられていたのは、「人間関係」(86%)と「管理」(76%)であった。「管理」の内容は、生徒の在籍、通知の問題等である。約半分の学校が、「社会的」なこと、「カリキュラム」「職業的」なこともリストにあげていた。ほとんどの学校で、チューター・グループへの配分は1学年で行われるが、56%の学校では特別の配分の基準はなかった。基準がある場合、最大の基準グループ(24%)は、すべての能力の広がり確保を努力がなされることである。そのほかは、「ハウスまたは学年の基礎」「アルファベット順」「教科に基づく」「チューターの選択」「知能」など多様である (Monks, op.cit., pp. 43-4)。

ハウスの中に、チューター・グループ(チュートリアル・グループとも呼ばれる)があることもある。各教員はハウスに所属し、ほとんどすべての教員が、ハウスマスターまたはハウスミストレスは別として、それぞれほぼ30人の生徒グループを担当する。グループは男女別、または男女混合である。年齢は11歳から18歳にわたる。いずれの場合も、チューターは通常生徒の入学から卒業まで担任する。大規模学校をより小さく分割する考えは、魅力的である。チューターが各生徒の父母と話をし、その生徒の興味関心を見守り、他の教師から生徒について情報を集めて分析し、生徒のコース選択や学校生活の多くの個人的問題について指導することは、すばらしい、理想的なことである。もちろんこの種のケアは、大規模校であれ、小規模校であれ、必要とされることである。現実には、しばしばその目標からはほど遠いといわれる。すぐれた人間的なチューターである教師もいるが、そうでない教師も多い。一人ひとりへのサービスの点では、チューター・グループは大きすぎる。たびたびの教師の異動は、ゆっくりと作り上げられる長期的立場の関係の理念を崩す。チューターは、グループのいくらかの生徒を、ほとんど教え

ないか全く教えないこともある。もしチューターがゲーム、音楽、ドラマのような学級外の興味関心を共有する場合は、このことはそれほど問題でないかもしれないが、共通の興味関心がない場合、接点を作ることは困難であるといわれる (Pedley, op.cit., pp. 123-4)。

ハウス・システムにしても、チューター・グループにしても、大規模校になることがときに避けられないコンプリヘンシヴ・スクールにおいて、その弱点を補うために導入された生活指導組織である。その組織を生かすも殺すもやはり関係者、とりわけ教師であるといえよう。

## 2 事例：ウッドベリー・ダウン校の生活指導組織

ここでは、校長 (Chetwynd, H.R.) が記すウッドベリー・ダウン校の事例を見ることにしよう。同校の生徒数は、1,250人である。ハウスのスタッフとして、まず上級のハウスマスターまたはハウスミストレスがおり、前者の場合もう1人のハウスマスターと2人のハウスミストレス、およびハウスの長に対してそれぞれ異性の副、すなわち2人の副ハウスミストレスおよび2人の副ハウスマスターがいる。同校には4つのハウスがあり、各ハウスの名称は、生徒によって選定されたものである。あらゆる生徒が青年期を通して、個人として親密に知られており、個人として指導されるよう適切に手を差しのべることのない学校は、たとえ施設や他の物質的便宜がどんなに優れていても、完全に満足のゆく教育を提供するようには思えないという。

第1学年の早い段階で、父母と子どもに「くつろいだ夕べ」が、各ハウスによって開催される。コーヒーを飲みながら、その制度の人的接触と個人的注意の機能が説明され、父母は、子どもの福祉に関係のあるすべての問題に気づくことによって、教師と十分協力するよう求められる。父母は次のことを思い出す。すなわち、学校が大規模であるのは、専門的な教員と設備により、子どもたちが十分な幅の広い教育の便宜を受けることができるためであり、生徒が真に思いやりのある理解ある教師らを知り、また教師らによって知られるようになるために、学校は小さいより親密なハウスと呼ばれるグループに分けられる、と。各ハウスの子どもたちは、学校と一緒にいる機会がたくさんある。4人の教員を利用する能力混合グループの実験を伴う教科では、教授単位はハウスのグループである。すべてのゲームは、ハウス単位で教えられるので、学校外の体育の多くは、当然こうした方針に沿っている。もっとも、当

然のことながら学校のチームの構成は、ハウス組織を横断するが。

各ハウスでは、月に1度、朝の礼拝があり、続いて無宗派の礼拝集会がある。この機会には、直接的な道徳教育や規律上のことに関する告知のための場であるが、そのほか全校集会のように、強調点はよきハウスの精神と伝統の形成の課題について、達成されたことの称賛と継続的な努力への奨励に置かれる。全く形式張らない機会は、第3学年以上の生徒である上級生に対して、ハウスのスタッフによって提供される週1度の「レクリエーションの夕べ」である。各ハウスは、月曜日から木曜日までのある日の夕方、5時半から7時半まで集まる。大きな食堂はクラブ・センターになり、ダンス、卓球、チェス、カード・ゲーム、ダーツのような多様な活動が行われる。テレビ・コーナーや喫茶室もある。服装はくつろいだものが着用され、ジーンズが目立つ。ハウス・スタッフだけでなく、可能なときはほかの教師もやって来て、友好的な雰囲気に入る。この2時間に父母が、ハウス・マスターやハウス・ミストレスに会いに来よう招かれる。両親とも働いていて、日中の面接は困難な家庭にとって、「レクリエーションの夕べ」は諸問題を話しあったり、子どもの進歩を議論したりするのに都合のよい機会を提供する。

ハウスの生徒と一緒に集まる主要な機会は、能力混合グループに基づく授業時間、食事時間、宗教礼拝や無宗派の礼拝集会のとき、「レクリエーションの夕べ」のクラブのときである。しかし、少なくともそしてより重要であるのは、ハウス・マスターまたはハウス・ミストレスと生徒の間の人間関係の発展である。最初の2年間は生徒は、副ハウス・マスターまたは副ハウス・ミストレスによって指導される。この教師は、学校生活が始まる早い週段階で各生徒と個人的に話しをし、ほかの多くの機会にその生徒と会う。第1学年と第2学年の全般的な指導助言は、上級の女性教師が行うので、ハウス・スタッフはどんな特別困難な問題も彼女に任せる。第3学年以降はハウスの長が、この責任を引き継ぎ、順に各生徒と面接をする。こうした話し合いの次に生徒は、くつろいで、話し合ってきた諸問題を含む質問項目に回答することによって、ハウスが生徒を援助するのを助けるよう求められる。このことによって、生徒の背景、高まる興味関心や能力、学校の、家庭のまたは個人的性質の諸困難の完全な有様が、記録として保持され、進路が議論され、または就職の時期がやってきたとき、指導のために利用され得る。第1学年と第2学年の質問項目は、生徒がどのように学校に落ち着き、学業や遊びに役立つ機会がどのよう

に利用されるかを示す。第3学年の終わりには、職業指導の書式がある徴候または個人的好みを与えてくれる。第4学年に提出される質問項目への回答は、ハウス・マスターが生徒の専門の学習の選択の成否を点検するのを可能にする。生徒が第5学年の課程の終わりに達するまでに、多くの教員メンバーがその生徒を十分によく知り、その生徒の第6級の学習に対する適否を判断することができるであろう。しかしこの段階で立案された質問項目のために、生徒は多くのことに関する自分の意思をはっきりさせ、外部団体の要求、自分じしんの学力および自分の家庭的背景の限界と要求に対して、将来を展望することが可能になる。

「適性および態度の記録」は、ハウスマスターによって保持されるが、フォーム（学級に相当）の教師によって毎年書き込まれる。それは、生徒の教育的・社会的行動の型の独自の光景を与える。このカードの裏は、与えられた進路の助言のノートのために使われる。回答された質問項目、記録カード、および教員または家庭からの他の適切な情報は、生徒じしんのハウス・ファイルに保持され、生徒や父母についてもっと知ることを必要とする教員メンバーに役立つ。生徒は、学業成績が悪いこと、無作法、遅刻等も、称賛に値する行為、例外的によい学業成績等も、ハウス・マスターに報告する。アカデミックな記録に責任を負う副校長との不断の相談により、ハウス・マスターはコンプリヘンシヴ・スクールの多様な課程を通しての生徒の進歩に気づく。

校長は、ウッドベリー・ダウン校に非行や保護観察の生徒が非常に少ない事実は、ハウス・スタッフの不断のケア、およびしっかりしているが親切な指導助言によって、と確信している。頭の中にはなく、紙上の記録を保持することによって、個人的接触に基づく知識は、各生徒の理解を共有することを、願う他のすべての同僚の自由に利用できる場所に置かれる。このようにして、大規模組織のより大きな教育の機会の利益、および学校生活を通して個人的に指導される各生徒に対する疑いのない利益が得られる（Chetwynd, H.R., Comprehensive School, Routledge & Kegan Paul, 1960, pp. 26-7, 90-102）。

ウッドベリー・ダウン校において、生活指導がうまくいっているのは、ハウスじしんの活動に工夫がなされており、生活指導担当のハウスのスタッフと学級教授担当の教師との協力関係がうまくいっていることによるところ大であるといつてよい。ハウスマスターやハウスミスが生活指導だけでなく、学級教授も担当していることは、学級教授のみ担当の教師との相互理解に役立っているわけである。

### 3 本校の生活指導組織の現状と課題

本校では、中高一貫を建前としているので、生活指導組織は中学校と高等学校とに分けることはせず、生徒指導部が全校（中学校・高等学校両校）の生活指導を担当している。全校の組織であるので、対象の生徒は異年齢である。生徒指導部は、生徒会活動・クラブ活動等を指導する生徒部、および生徒の規律・交通安全・清掃美化等を指導する指導部に分かれる。生徒会は、中学校生徒会と高等学校生徒会に分けて指導される。クラブ活動には、中学校と高等学校とを別に組織している部・サークル・クラブとなっているもの（運動部に多い）と、両者が一緒になっているものがある。

以上は異年齢集団であるが、生活指導は同年齢集団である学年・学級組織を通しても行われている。各学年の学級には、学級担任と学級副担任がおり、各学年には学年主任がいる。したがって各学級の生活指導は学級担任と学級副担任が携わり、その上に学年主任も携わることになる。特別指導ともなれば、その上に指導部長、生徒指導担当運営委員および校長が関与することになる。

本校が法律に基づく中高一貫校である併設型中・高等学校になっても、以上の体制は基本的に維持されると思われるが、よりきめの細かい生活指導をしようとするならば、中高一貫校のイギリスのコンプリヘンシヴ・スクールのハウス・システムが参考になる。ハウス・システムは、アメリカで導入しているところもあるといわれるが、全校集団は異年齢（縦割り）集団に小分けされ、生徒は中高一貫して原則として同じハウスに属するところに特徴がある。ゲーム、演劇等や、異年齢集団とする授業は、ハウスを単位にすることが考えられる。もともと、ハウス・システムは本校にとって異質な組織であり、従来の生活指導組織との関係、学級との関係をどうするかなどより深い検討が必要となる。